

主 題：教会のあるべき姿 : 成長⑩

聖書箇所：エペソ人への手紙 4章14－16節

テーマ：聖書の教える教会のあるべき姿とは？

いよいよ“教会のあるべき姿”のシリーズもきょうで終わりです。これまでみなさんと一緒に教会の土台、使命、そして成長と、時間をとって考えてきました。教会がどんな土台に立ち続けなければいけないのか？どんな使命を果たしていくべきなのか？どうすればキリストに喜ばれる教会として成長し続けていけるのか？その答えをみことばから見てきたのです。きょうはその最後のまとめを、前回に引き続いてエペソ人への手紙4章特に16節から見たいと思います。皆さん、今日も内容は盛りだくさんです。でも、せっかくなので、最後にこれまでの振り返りも含めて一度1節から16節をすべて読みたいと思います。これまでの内容を思い出しながらかみことばを追ってみてください。パウロはこう記していました。

エペソ4：1－16

「1 さて、主の四人である私はあなたがたに勧めます。召されたあなたがたは、その召しにふさわしく歩みなさい。:2 謙遜と柔和の限りを尽くし、寛容を示し、愛をもって互いに忍び合い、:3 平和のきずなで結ばれて御霊の一致を熱心に保ちなさい。:4 からだは一つ、御霊は一つです。あなたがたが召されたとき、召しのもたらした望みが一つであったのと同じです。:5 主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つです。:6 すべてのものの上であり、すべてのものを貫き、すべてのもののうちにおられる、すべてのものの父なる神は一つです。:7 しかし、私たちはひとりひとり、キリストの賜物の量りに従って恵みを与えられました。:8 そこで、こう言われています。「高い所に上られたとき、彼は多くの捕虜を引き連れ、人々に賜物を分け与えられた。」:9 —この「上られた」ということばは、彼がまず地の低い所に下られた、ということではなくて何でしょう。:10 この下られた方自身が、すべてのものを満たすために、もろもろの天よりも高く上られた方なのです。—:11 こうして、キリストご自身が、ある人を使徒、ある人を預言者、ある人を伝道者、ある人を牧師また教師として、お立てになったのです。:12 それは、聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせ、キリストのからだを建て上げるためであり、:13 ついに、私たちがみな、信仰の一致と神の御子に関する知識の一致とに達し、完全におとなになって、キリストの満ち満ちた身たけにまで達するためです。:14 それは、私たちがもはや、子どもではなくて、人の悪巧みや、人を欺く悪賢い策略により、教えの風に吹き回されたり、波にもたあそばれたりすることがなく、:15 むしろ、愛をもって真理を語り、あらゆる点において成長し、かしらなるキリストに達することができるためなのです。:16 キリストによって、からだ全体は、一つ一つの部分はその力量にふさわしく働く力により、また、備えられたあらゆる結び目によって、しっかりと組み合わされ、結び合わされ、成長して、愛のうちに建てられるのです。」

さて、きょうの内容に入っていく前に、先々週から私たちが考えていることを少し思い返してみてください。13節に記されていた、教会に対してキリストが持っておられる究極的な目標を目指していく上で、私たちが注意すべき点を見てきました。私たちがゴールへと到達していくために、今私たちが何をすべきなのかが、14－16節の中に記されていたのです。これまでに五つある注意点のうち二つを見ました。

○目標を目指して成長する教会：その過程における五つの注意点

1. いつまでも子どものように惑わされないこと 14節

一つ目は、目標を目指して今を生活している私たちは、「いつまでも霊的に未熟でだまされやすい子どものままでいてはいけない」と教えられていたのです。

2. 愛のうちに真理を固く保って成長すること 15節

私たちは子どものままでいてはいけないと教えられていただけではなくて、二つ目に、いつもみことばの真理に根ざして成長していくことが求められていたのです。「互いの間で愛をもって真理する人として歩いていくこと」これが、私たちが目標を目指して成長していく上で為していくべき大切な務めでした。では最後、残りの三つをみなさんと一緒に見ていきましょう。

3. キリストが成長の源であると覚えること 16a節

目標を目指して教会が成長していく上で注意すべき三つ目の点、それは、「キリストが成長の源であると覚えること」です。16節は次のことばで始まっていました。「キリストによって、からだ全体は、」と。確かに日本語の聖書を見るとこのように記されているのですが、この部分を原文そのままに訳せば、ここは「彼から、からだ全体は、」と訳すことができます。この「彼」とは、15節の最後に出てきていたように「かしらなるキリスト」のことを指しているのです。つまりパウロはここで「からだ全体」、言い換えれば、キリストのからだである教会全体は、「かしらなるキリスト」によって成長していくのだと教えていました。「兄弟たち、あなたたちは成長を目指していくのだけれども、その成長は「かしらなるキリスト」によって成し遂げられていくのです。」と。

◎聖書が意味する、キリストが「かしら」である、とは？

では、キリストがかしらであるとは、そもそも一体どういうことでしょうか？「かしら」と言ったときに、聖書は何を意味しているのでしょうか？その意味に関して、少なくとも二つのことをみことばから見てとることができます。

①キリストが絶対的な権威を持ったお方

キリストが「かしら」であるということは、「キリストが絶対的な権威を持ったお方」だということです。以前にも少し見たエペソ1:20-22で、パウロはこの「かしら」という表現を用いてキリストの姿を描いていました。「:20 神は、その全能の力をキリストのうちに働かせて、キリストを死者の中からよみがえらせ、天上においてご自分の右の座に着かせて、:21 すべての支配、権威、権力、主権の上に、また、今の世ばかりでなく、次に来る世においてもとなえられる、すべての名の上に高く置かれました。:22 また、神は、いっさいのものをキリストの足の下に従わせ、いっさいのものの上に立つかしらであるキリストを、教会にお与えになりました。」

パウロはキリストこそが「すべての支配、権威、権力、主権」といったものに勝る偉大なお方であること、いっさいのものをご自分の支配下に置いておられる絶対的な主権者であることを教えていたのです。キリストこそが絶対的な主権者。だから、教会において何をするかを決めるその決定権は私たちにはないのです。すべての決定権をもっておられるのは、キリストなのだ。そして、この方が絶対的な権威を持っておられるお方であるからこそ、この方の「からだ」である教会は、当然「かしら」に従っていくことが求められていました。

この姿に関しては同じエペソ5章の後半23-24でも、パウロは再び「かしら」ということばを用いてこのように述べています。「:23 なぜなら、キリストは教会のかしらであって、ご自身がそのからだの救い主であられるように、夫は妻のかしらであるからです。:24 教会がキリストに従うように、妻も、すべてのことにおいて、夫に従うべきです。」パウロがここで何を言わんとしていたのかは明白です。彼は家庭において、その「かしら」である夫の権威、リーダーシップに妻が従っていくようにと求めていました。でも、その点を強調するためにパウロが引き合いに出していたものが、「キリストが教会のかしら」であることでした。パウロは、教会がかしらであるキリストの権威に従っていくのと同じように、妻が夫に従っていくことを求めていたのです。ですから、こういったパウロのことばを考えると、キリストが「かしら」であるということばは、キリストが絶対的な権威をもったお方であるのだと言えます。キリストこそが教会のすべての面における権威者なのだと言えるのです。

②キリストは教会の成長の源となるお方

でも同時に、「キリストがかしら」であるということには、もう一つの意味があります。こちらの意味の方が今回見ている私たちの4章16節にはより当てはまります。二つ目に言えるのは、「キリストは教会の成長の源となるお方」だということです。「キリストがかしら」であるということは、「この方が絶対的な主権者、権威者」であるだけでなく、教会が成長していくのに必要なものを提供してくれる「成長の根源」だということです。だからパウロは、「この方から(彼から)私たちの成長に必要な力がやってくる」と話しているのです。逆を言えば、この「かしらであるキリスト」に私たちがしっかりと結びついていなければ、教会は成長していくことはない、ということです。

このことに関してパウロはコロサイ2：19でもはっきりと教えていました。「かしらに堅く結びつくことをしません。このかしらがもとになり、からだ全体は、関節と筋によって養われ、結び合されて、神によって成長させられるのです。」と。「かしらがもとになり、からだ全体は成長」していくのです。からだの成長に必要なものは、その源であるキリストによって与えられるのです。だからこそ私たちが成長を望むのなら、この方に固く結びついていることが何よりも大切になるのです。

これまでの文脈、エペソ4章を振り返ってもまさにそうでしたね。キリストの姿を覚えるときに、キリストは、私たちが教会を建て上げていくのに必要な霊的賜物を、恵みによってそれぞれに与えてくださっていたし、そんな私たちを整えるために、霊的リーダーを備えてくださっていたし、教会を建て上げていくのに必要な設計図も、それ以外の必要な知恵や力も、真理のみことばを通して私たちに継続的に与えてくださるのです。私たちの成長に必要な力や助けというものは、この方からすべてやってきます。だからこそ、キリストに根ざしていくことなしに、私たちの成長を成し遂げることは、決してできないのです。

皆さん、この方が、成長をしていくために絶対に結びついていなければならない源であるとするなら、何があっても、私たちはこの源であるキリストに根ざそうとしているのでしょうか？このキリストにますます結びついていくことを願っておられるのでしょうか？それとも、私たちが成長することを考えるときに、キリスト以外のものに目を向けて、キリスト以外のところに成長の秘訣を見出そうとしたり、自分自身の知恵や力に頼ろうとしていないのでしょうか？皆さんもイエス様が次のように言われたことばをよくご存知だと思います。イエス様はヨハネ15：5で「わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないからです。」と言われました。私たちが考えていなければいけないこと、それは、私たちはキリストを離れては何もすることができないということです。成長を目指していくのなら、成長したいと望むのなら、私たちはこのキリストに根ざしている必要があるのです。教会が成長していくのに必要なのは、自分たちの考えや経験などに基づくことではありません。色々なものに心を奪われるのではなく、成長の源であるキリストをいつも覚えていることです。このキリストに根ざして、この方により頼むときに、私たちは成長していくのだと。だから、私たちが目標を目指していくときに、成長していこうとするときに大切になるのは、成長の源であるキリストをいつも覚えていることです。

4. 兄弟姉妹といつも結びついて仕えていくこと

目標を目指して教会が成長していく上で注意すべき四つ目の点は、「兄弟姉妹といつも結びついて、仕えていくこと」です。成長を目指していくのなら、兄弟姉妹といつも結びついていなければいけません。これから詳しい内容を見ていきますが、その前にこの16節が言わんとしている内容、特に中心となる部分を皆さんと一緒に考えたいと思います。16節を最初に読んだとき、16節は色々なことばや表現が次々に出てきているけど、結局パウロはここで何を言いたかったのだろう？いまいち何を言いたいのかがかつかめないと思った方はいませんか？思われた方があれば安心してください。この箇所

は、多くの牧師先生や聖書註解者たちにとっても、とても理解することが難しい箇所の一つとされています。ロイド・ジョーンズという先生もこの箇所に関してこういうふうに言っています。

「このことばは、使徒パウロが書いたものの中で、もっともこみ入った言い回しの一つであることは間違いない。古い時代の聖書註解者たち、実際には、初代教会時代の何人かの教父が、大胆でおもしろい示唆を与えている。それはたった一度、パウロの頭が多少混乱し、心も気持ちもどこかに飛んでしまった。そして文章の初めに書いたことを忘れてしまうほど、次から次へとことばを重ねていったと。」もちろん、パウロがただ意味もなくことばを重ねるはずは決してありません。でもそう思えるほど、さまざまな表現や言い回しがここには用いられているのです。だからこそ、この箇所を一見すれば理解するのが非常に困難に思えます。

では皆さん、聖書を色々読んでいて、複雑な箇所に出会ったときはどうすればいいと思いますか？できることは、その文章の中心となる部分をまず見つけることです。特に、主語と述語を正しく押さえることが、私たちがみことば読んでいく上でとても大切になるのです。私たちの持っているこの日本語の聖書は翻訳してくださった方がこの複雑な箇所をどうにかわかりやすくしようとしてくださっていて、それはほんとに感謝なことですが、でも残念ながら、このままではこの箇所の中心となる部分を見つけるのが難しくなっています。そのため、この箇所の原文を直訳したものを載せておきましたので、今から私はそれを読みます。この箇所の中心となる部分、特に主語と述語の部分を見つけてみてください。

原文直訳

「彼から(キリストによって)、からだ全体が、①組み合され、②結び合され、③備えられたあらゆる結び目によって、また、④一つ一つの部分はその力量にふさわしく働く力によって、それ自身の建設のために、愛のうちにからだの成長を引き起こします(もたらします)。」

複雑ですね。中心となる部分がわかりましたか？みなさんに理解してほしいことはこういうことです。色々なことばがこの箇所では重ねられているのですが、中心となる部分だけを取り出すなら、ここは「からだ全体が、からだの成長を引き起こします(もたらします)。」と言っているのです。つまり、からだに成長をもたらしてくれるのは、教会全体の働きだ、ということです。教会は、からだ全体が働いていくことを通して成長していくのだとパウロは教えています。

あれ？さっき「教会の成長はキリストによってもたらされる」とパウロは言っていませんでしたか？と気づかれた方がいるかもしれません。ここは大切なところなのでよく覚えておいてください。確かにパウロは、私たちはキリストによって成長していくと教えていました。キリストこそが成長の源であるので、私たちはこの方にいつも固く結びついている必要があるのです。しかし同時に、からだの成長は、からだ全体が働くことによっても生み出されるのです。もっと言えば、キリストのからだに属している私たちひとりひとりが愛のうちに働くことによって、教会は成長していくということです。ですから、私たちを成長させてくださるその究極的な源はキリストですが、でも、この方は私たちひとりひとりをを用いることによって、そのからだに成長を生み出そうとされるのです。だからこそ、私たちが成長していくことをもし望むのなら、もちろんこのかしらであるキリストに結びついていなければいけません。成長の源に結びついていなければ、絶対に成長することはありません。でもそれと同じぐらい、私たちが成長していくためには、同じからだに属している兄弟姉妹と結びついていなければいけないということです。からだ全体がからだの成長をもたらすのだと教えているのです。

●からだ全体がからだの成長をもたらす手段：

では、具体的にどのようにしてからだ全体はからだの成長を生み出すのか？それがこの箇所の主語と最後の述語に挟まれている残りの部分で表現されているのです。どんなことが書かれているのか？一つ一つ原文の言語の順番で見いきましょう。

a) **組み合わせられ** まず、「からだ全体が」次に出てきたのが①「組み合わせられる」ということばでした。このことばは珍しいことばで新約聖書の中でこのこと、同じエペソ2：21にしか出てきません。新約聖書の中で2回しか出てこないのです。2：21を見てみると「この方であって、組み合わせられた建物の全体が成長し、主にある聖なる宮となるのであり、」と書いてあります。この「組み合わせられる」ということばを考えたときに、このことばは、今読んだエペソ2：21のほうがわかりやすいのですが、「建物を建て上げる」とか、特に「石を使って建設する」といったことを表現するために用いられます。建物を建て上げる時、特に石を組み合わせさせて建物を建て上げていくような時に用いられることばです。ちょっと想像してみてください。今と違ってパウロの時代、人々は石を組み合わせることによって建物を建てようとしていました。今の時代だったら色々な機械があるので、それぞれの石がうまく組み合わせられるように、削ることも磨くことも容易にできます。でもパウロの時代を考えれば、そんな機械などは当然ありません。人々は自分たちの手でバラバラな大きさの石を丁寧に切って、それをうまく組み合わせることが必要でした。そのように人々が丁寧に石を切り取って、削り取って、きちんと形にして、整えられ組み合わせられて、初めて建物は建て上げられていったのです。このイメージをパウロはこの教会に対して使っています。まるで丁寧に石が削られて、上手く組み合わせられている建物のように、教会というのは、そこに属している人たちが完璧に組み合わせられているものなのだ。建物を造るために石を組み合わせるように、教会というのも、教会に属しているすべての者たちがキリストによって整えられて、上手く組み合わせられているのだということです。

考えてみれば、かつて、大きさもバラバラで、それぞれが角ばっていたような色々な違いを持っていた私たちが、今はキリストによって整えられて、上手く組み合わせられることによって、一つのからだを構成しています。それが教会です。これは、キリストの働きによってなされるのですが、その働きによって一つ一つの部分が丁寧に組み合わせられてできているからこそ、教会の中には不必要な存在はだれひとりとしていないのです。もし私たちがこうやってきちんと石を組み合わせたとして、そこから一個でも取って抜き出したらどうなります？崩れますね。同じように教会というものを見たときに、キリストに属している人たちが上手い具合にキリストによって組み合わせられているからこそ、だれひとりとして不必要な者はいないし、だれひとりとしてそこから取り出されることもないのです。そんなことをしたらバランスが崩れてしまいます。私たちは互いが互いを必要とする者として、上手く組み合わせられている以上、それにふさわしい者として歩んでいくことが求められているのです。

b) **結び合され** パウロはここで「組み合わせられる」ということばだけではなく、②「結び合される」ということばも続けていました。「結び合される」ということばにもさまざまな意味があるのですが、ここでは特に「二つのものが一つとされる」とか、「互いに編み込まれる」とか「親密なものとして繋ぎ合される」といった意味で用いられています。特に 霊的や精神的な部分、心の内側に至るまで、親密に繋ぎ合されているようなことを意味することばです。パウロはここで、この「結び合される」ということばで何を表現したかったのか？それは、私たちは単に組み合わせられているだけではないということでした。私たちは単に組み合わせられているだけではなく、組み合わせられている私たちの結びつきというものは、非常に堅固なもの、非常に親密なものだということです。私たちはみな同じ心、同じ思いを持って組み合わせられ、結び合されているのです。そして、そんな密接に繋ぎ合された者として、私たちは一つのからだ、一つの教会を構成しているのだと教えています。

だからこそ、私たちが教会というものを考えるときに覚えておかなければいけないのは、教会というのは、神様を愛する人たちが、ただなんとなくバラバラに存在している場所ではないということです。教会というのは、かしらなるキリストに固く結びついていて、このキリストによって上手に組み合わせられ、しかも、親密に組み合わせられている私たちが、同じ心、同じ思いで成長を目指していこうとしているそのような集まりだ、ということです。私たちはバラバラに過ごそうとしているのではなく、親密に

キリストによって密接に組み合わされた者として成長しようとしているのです。だからこそ、だれひとりとして、不必要な人はいないし、だれひとりとしてその働きにふさわしくない者もないのです。私たちは互いに固く結び合わされている以上、それにふさわしい者として、同じ心で一致して歩いていくことが求められています。

c) 備えられたあらゆる結び目によって

また三つ目に③「備えられたあらゆる結び目によって」ということばが出てきました。ここで使われている「結び目」ということばは、「関節」とか「靭帯」と訳せるようなことばが用いられています。そのことばに関してはロイド・ジョンズ氏がわかりやすく次のように教えてくれています。この結び目ということばに関して、「このことばは「バンド、(ひも)」や連結した鎖というように訳されるのが良い。言い換えれば、パウロは、こういったひもは、私たちを一つに結び合わせるだけではないと言う。そのような役割もあるが、もっとも重要なこともする。このようなひもや連結した鎖によって、いのちや力を、からだのあらゆる部分に送るのである。」と。ちょっと例えが悪いかもしれませんが、少し想像してみてください。私たちのからだから、関節や靭帯がすべてなくなると仮定すると、私たちのからだはどうなるのでしょうか？私たちのからだは正常に動かなくなりますよね。どれだけ脳が足や腕に向かって、「このように動かしなさい。」と命じたとしても、からだは言うことを聞いてくれません。私たちはそんな状態では生きていくことができないのです。私たちのからだ安定した状態で生きていくためには、からだのそれぞれの部分がしっかりとひもによってくっついている必要があります。

教会もこれと同じで、私たちの成長の源はキリストだったのです。キリストがかしらであって、この方がからだの成長に必要な栄養を私たちに与えようとしてくださっているのです。この方が、私たちがどう働いていくべきなのか、その指示をも与えようとしてくださっています。そういったものを、からだの隅々まで行き渡らせようとするなら、私たちが互いにひもによって結びついていなければいけないということです。私たちはかしらと繋がっているのですが、その私たちもみな全員がくっついているのです。私たちがくっついていることによって、キリストから得た成長していくのに必要なものを、互いに分かち合うことができるのだと、キリストから得たものを互いに分かち合うことによって、私たちは成長していくことができるのだということです。だからこそ皆さん、私たちが成長していくためには、これも何度も言われることですが、他の兄弟姉妹が欠かせないということです。

確かに私たちはそれぞれが、みことばを読んだり、祈ることによって神様のことを学んでいくことはできます。でも、この箇所ではパウロが繰り返し、繰り返し言っていたことは、「私たちの成長には、キリストからやって来る成長に必要な要素を繋いでくれる、兄弟姉妹が必要なのだ、必要な要素はキリストからやってきて、兄弟姉妹を通してそれぞれの場所に行き渡る、自分のところにやってくる」ということです。だから、私たちは互いに組み合わされ、結び合わされ、繋がっている必要があるわけで、それを通して成長していくのだと教えているのです。

d) 一つ一つの部分がその力量にふさわしく働く力により

そして最後に、パウロはこれまでのことばに加えて④「一つ一つの部分がその力量にふさわしく働く力により、」と言っていました。このことばをもってパウロが言わんとしたことを簡潔に言うなら、「私たちはキリストによって与えられた力量に応じて、それぞれが働いていかなければいけない。」ということです。私たちはひとりひとり自分に与えられたものを用いて、主と教会とに仕えていかなければいけないと教えています。この考え方は以前にも見ましたね。7節でもパウロは「しかし、私たちはひとりひとり、キリストの賜物の量りに従って恵みを与えられました。」と言っていたのです。キリストは恵みによって私たちひとりひとりに賜物を与えて下さいました。すべてのクリスチャンは少なくとも一つ以上の賜物を例外なく持っているのです。でも、だれひとりとしてそのすべてを持っている人はいませんでした。キリストは量りに従って、それぞれに必要な分だけを与えてくださったのです。私たちひとりひと

りが自分自身を見れば、確かにひとりひとりのうちには欠けているところ、足りない部分があるのですが、そんな欠けている私たちが互いに集まれば、欠けている部分を補い合うことができるのです。教会はこうしてそれぞれの力量にふさわしく人々が働いていき、互いに組み合わせられて一つとなって仕え合っていくことを通して成長していきます。それぞれがその人にしかできない特別な働きを担っていくからこそ、キリストのからだには、だれひとりとして必要のない存在も、また傍観者として何もしないでいい存在もないのです。パウロはそのことをⅠコリント12:20-21でも「:20 しかしこういうわけで、器官は多くありますが、からだは一つなのです。:21 そこで、目が手に向かって、「私はあなたを必要としない。」ということとはできないし、頭が足に向かって、「私はあなたを必要としない。」と言うこともできません。」と言っていました。からだは成長していくためにはすべての器官がバラバラに働くのではありません。繋ぎ合わされて、それぞれに与えられた働きを忠実に果たしていくことが求められているのです。キリストのからだに属している私たちは、組み合わせられて、結び合わされています。そして、その私たちがしっかりとひもによってかしらであるキリストに結びついているがゆえに、成長に必要なものがそれぞれのところに行き渡るのです。そして、その与えられたものを私たちひとりひとりが用いて働いていくことによって、からだは成長していくのだと。だから、バラバラでは絶対に成長できないということです。兄弟姉妹は絶対に私たちには必要なのだということです。

だとすれば、私たちはそれぞれに与えた責任を今果たしているのかが問われています。覚えておかなければいけないのは、私たちがこのように教会に集って来るのは、その場に行って、自分のためになるような話を聞いたり、自分が望んでいるものを手にするためではありません。兄弟姉妹と交わりをすることもすばらしいことですが、それによってただ自分自身を満足させるために私たちは教会に集まっているのではありません。私たちはキリストによって組み合わせられた者たち、結び合わされた者として、互いに自分の役割を全うし、仕え合うことを通して成長を目指していくのです。そのために私たちは集まって来るし、私たちは神の家族として生きていくのです。私たちが成長していくためには、その源であるキリストに根ざしていることが大切です。でも同時に、兄弟姉妹といつも組み合わせられ、結びついてそれぞれに与えられた責任をしっかりと果たして働いていくことも同じくらい大切だということです。

きょう、自分に与えられた賜物を用いて仕えることで、からだの成長を目指して歩んでいるでしょうか？成長していくために、他の兄弟姉妹とますます結びついていくことを私たちは願っているでしょうか？それとも、自分に与えられた役割を拒んでいたたり、他の兄弟姉妹と距離を取ろうとしているでしょうか？もう何度もパウロが言っていますが、私たちはひとりで信仰生活を歩んでいくではありません。ましてや、ここで言われていたのは、「私たちはひとりではなく、からだ全体で成長していく」ということです。私たちにとって大切なことは、成長の源であるキリストをいつも覚えて、兄弟姉妹といつも結びついて仕えていくことです。それを通して私たちは成長していきます。

5. 愛を動機としてすべてを為していくこと 16c節

最後、目標を目指して教会が成長していく上で注意すべき五つ目の点は、「愛を動機としてすべてを為していくこと」です。私たちが一致してからだの成長を目指していくのなら、必ずそこには「愛」がなければいけないということです。パウロはこのことに関しても1-16節の中で、この「愛」について何度も繰り返して教えていました。2節を見ても「愛をもって互いに忍び合い」と言っていたし、15節でも「愛をもって真理を語り」と言っていたし、この16節でも「愛のうちに建てられるのです」と言っていたのです。

皆さん、一体どうしてパウロは教会を建て上げることを話して行く時に、「愛」について繰り返し、繰り返し触れているのだと思います？少し質問を変えましょう。どうして、私たちは他の兄弟姉妹とともに歩んでいくことをときに難しさを覚えてしまうのでしょうか？それは、そこに痛みや犠牲というもの

が伴うことを、みなが知っているからです。私たちは救われた後も罪の性質を持っています。だからこそ、互いの間で傷つけたり傷つけられたりすることがあります。例えば、相手のことを思って言ったことであつたとしても、相手が聞く耳を持たなかったり、怒って争いを引き起こすようなことばを口にするかもしれません。信頼していた人に裏切られることもあるかもしれないし、また、あなたに対して罪を犯した人があなたのところにやって来て、「私が行ったことは間違いでした、悔い改めます。」と言ったにもかかわらず、同じことをまた何度も繰り返すかもしれません。私たちは色々なことを経験します。そのようなさまざまなことを通して自分の心が傷つけば傷つくほど、もう私はだれからも傷つけられたくない、だから私には教会や兄弟姉妹はもう必要ではない。神様と聖書だけあれば私はもう大丈夫だから、十分だから・・・こうして心を閉ざしてしまったり、自分と合わない人から距離をとって、関わることをやめたり、自分を理解してくれる人とだけ一緒にいるようになったりするのはです。こんな経験を皆さんはしたことありません？もしくは、今経験されているかもしれません。でも、このような振る舞いはからだ全体の成長を目指していく者としてふさわしい生き方なのでしょうか？違いますよね。きょう見たように、みことばがはっきりと教えているのは、「私たちの成長には兄弟姉妹が欠かせない」ということでした。キリストのからだに属している私たちは、そのからだから分離しては成長していくことができないのです。どんな時も他の兄弟姉妹と「結び合わされる」ことによって、私たちは成長していきます。だからこそ皆さん、私たちには「愛」が必要になるのです。私たちは「互いに赦し合う」ことが必要になるのです。パウロはコロサイ3：13－14でもこのように言っていました。「:13 互いに忍び合い、だれかがほかの人に不満を抱くことがあっても、互いに赦し合いなさい。主があなたがたを赦してくださったように、あなたがたもそうしなさい。:14 そして、これらすべての上に、愛を着けなさい。愛は結びの帯として完全なものです。」と。

皆さん、教会というものを考えるときに、教会というのは、罪を赦され新しく造り変えられた者たちが集まっているところです。でも、そこには性別や年齢、国籍や文化、育ってきた環境や社会的な立場の異なる人がいます。考え方も価値観も、それぞれに違う人たちがいます。そして、それぞれが罪の性質を持っているのです。そんな教会に「愛」がなければどうなるでしょう？そんな教会は、絶えず起こる争いによって引き裂かれてバラバラになってしまうのです。教会が一致を保っていくために、互いを結びつけていてくれるもの、それが「愛」だということです。「愛は結びの帯」なのだ。またパウロはエペソ4章の続きのところでも似たようなことを口にしていました。4：32と5：1－2のところ。「:32 お互いに親切にし、心の優しい人となり、神がキリストにおいてあなたがたを赦してくださったように、互いに赦し合いなさい。」「:1 ですから、愛されているこどもらしく、神にならう者となりなさい。:2 また、愛のうちに歩みなさい。キリストもあなたがたを愛して、私たちのために、ご自身を神へのささげ物、また供え物とし、香ばしいかおりをおささげになりました。」と。みことばが教えていることは、「私たちはキリストが私たちを愛してくださったように互いに愛し合う」ということ、「私たちはキリストが赦してくださったように赦し合っていく」ということです。

ここで皆さん覚えておいてください。パウロがコロサイの中でもまたエペソの中でも用いていた「赦し合いなさい」ということばの語源は「恵み」ということばから来ています。「恵み」ということばから「赦す」ということばが出ています。どういうことかと言えば、それは、私たちが示す「赦す」というのは、相手がそれに値しなくても、喜んで惜しみなく与えるもの、だということです。どんな場面においても、だれかが私たちに罪を犯した場合、私たちはそのことに対してやり返すことができます。相手のしたことをいつまでも根に持って相手を責めることもできます。直接言わなくても、陰口やゴシップを流すことだってできます。でも、「愛」はそれをしない、ということです。その人がしたことを考えれば、罰を与えるのが当然のことかもしれません。でも、罰を与える代わりに、「恵み」でもってその人を喜んで赦してあげるといえることです。聖書が教えている「赦し」とは、「恵み」によって与

えるもの」だということです。だからこそ、私たちがだれかを赦すときに、「あれこれをしたら、私はあなたを赦してあげます」などとは言いません。自分の中でさまざまな基準を設けて、「これらをしっ
かり達成してくれたら、私はあなたを赦してあげます、そうすればあなたは私の赦しに値します。」な
どということは言わないのです。どうしてそんなことを言わないのか？それは、神様が私たちに与えて
くださったその「赦し」が、私たちのそれとは全く異なるからです。神様が私たちに赦してくださっ
たとき、私たちがそれに値したから神様が私に「赦し」を与えてくださったわけではありません。私
たちが神様の敵として歩んでいたそのときに、私たちが神様に逆らって歩んでいたまさにそのときに、こ
の方は「愛」を示してくださったのです。ローマ5：8でも「しかしわたしたちがまだ罪人であったとき、キ
リストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられま
す。」と書かれています。私たちが、「あなたのことなど知りません、あなたになんて従いたくありませ
ん、あなたのことは私の生活には要りません、私の人生には要りません。」と逆らって敵対していたそ
のようなときに、神様は私たちに愛をすでに示してくださったということです。だとすれば皆さん、こ
の「愛」に私たちが倣って、互いに仕え合っていこうとするのなら、この「愛」を、この「赦し」を私
たちが実践していくのなら、私たちはこの方の「赦し」をいつも覚えていなければいけないというこ
とです。

確かに、「赦し合う」ということは難しく感じることです。もっと正確に言えば、自分がどれだけ赦
されているのかを理解していなければ、他の人を赦すことは難しいことです。自分がどれだけ赦されて
いるのかを正しく理解していなければ、他の人を赦すなんてことは、もしかしたら不可能に感じるか
もしれません。皆さん、私たちがいつも覚えておかなければいけないことは、私たちがどれだけキリスト
によって赦されているか、ということです。難しさを感じるものがあれば、どれほど神様が私たちのこ
とを赦してくださったのかを思い出すことです。

皆さん、キリストは私たちの罪をどんなふうに赦してくださいました？キリストの「赦し」には決め
られた回数がありました？あなたはこれだけの回数の罪を犯したから、もうわたしはあなたのことを赦
しませんという、そんな限度はありました？ありませんでした。主は私たちの全ての罪を赦してくださ
ったのです。キリストの「赦し」は、私たちが何かを達成したから与えられたものでしたか？私たちが
それに値する何かをしたからキリストは赦しを与えてくださった、というようなものではありませんで
した。主が、一方的な恵みによって私たちの罪を赦してくださったのです。キリストの「赦し」は、こ
の部分赦してあげますが、この部分は赦してあげません、というような部分的なものでしたか？ま
た、あなたを赦すけれども、もう二度とわたしはあなたと関係を持ちたくありません、あなたのことな
ど、もう見たくもないし、あなたの捧げる祈りなどもう聞きたくありません、というような赦しでは
したか？そうではなかったのです。主は、私たちが心から悔い改めて罪を告白するのなら、その罪を赦して
くださるとそう約束してくださっています。いつもその関係を回復してくださるのだということも約束
して下さっているのです。

主はこのように私たちに赦してくださいました。こんな「赦し」が私たちひとりひとりには与えられ
ているのです。この赦しを与えられた私たちは、これと同じように「互いの間で赦し」を実践しているで
しょうか？「愛」を実践しているのでしょうか？今、皆さんひとりひとりが実践しているその「愛」を、
その「赦し」を、もし、キリストがあなたに示されたとしたら、皆さんはそれでハッピーになります
か？どう思います？

皆さん、完璧な教会というものは存在しないし、罪を持っていない人もいません。だからこそ、すれ
違いや争いというものは残念ながら起こってしまいます。この先も必ずあります。私たちが教会生活を
していけば、必ずそこに争いや難しさというものを経験します。問題は、それが起こったときにどのよ
うに応答するかです。それを避けようとしても必ず直面します。問題は、それにどのように愛を示し、

赦していくかということです。鍵はどこにあるのか？鍵は私たちのうちにはありません。鍵は、私たちのことを赦してくださったイエス様の十字架にあるのです。この方の姿をいつも覚えること、この方と同じように互いに愛し合っていくこと、赦し合っていくことです。成長の源であるキリストをいつも覚えること、兄弟姉妹といつも結びついて仕えていくこと、そして何よりも愛を動機としてそれら全てのことを為していくこと、それらを通して私たちは成長していくのです。

〇まとめ

私たちは16節のみことばから、目標を目指して教会が成長していく上でどんな点に注意すべきなのか、その最後の三つのことを考えました。私たちが成長していくためには、成長の源であるキリストを覚えておくこと、この方にいつも根ざしていること、そして同時に、他の兄弟姉妹と固く結びついてもともに働いていくことが求められていました。そんな姿が今私たちのうちに実際に見られるでしょうか？どんなときもみことばに心を向けて、さまざまな誘惑や間違った教えの風が吹いて来たとしても、いつも成長の源であるキリストに難く立って歩もうとしているでしょうか？また、自分の成長には他の兄弟姉妹が絶対に必要だということを、どれだけ真剣に考えて私たちは日々を過ごしているでしょうか？口ではいくらでも、「私にとって必要です」と言うことができます。問題は、今どれだけ互いに仕え合っているかです。互いの成長のために、成長の益となることを喜んで為そうとしているかどうかです。皆さん、一旦ペンを置いて周りを見渡してみてください。そこに座っている兄弟姉妹ひとりひとりが、あなたの成長のためには必要だということです。だれひとり欠けてはいけないし、完璧なものがすべてうまく組み合わされて教会には与えられています。だからこの兄弟姉妹とともに成長を目指していくことです。

そして最後に、私たちはそれら全てのことを、愛を動機として為していくことです。皆さん、私たちは同じ主によって救われ、同じ主を愛する神の家族として今を生きています。同じキリストの愛を知ったのです。だとしたら、その愛を互いに実践し成長していくことです。

こうして、私たちは“教会のあるべき姿”について、みことばを見てきました。確実に言えるのは、私たちは、個人としても教会としてもまだまだ成長していく部分がたくさんあるということです。でも皆さん、私たちの成長に必要なものはもうすでに与えられています。教会を建て上げていくのに必要な道具も、材料も、またそれら全てのことやどうやって組み合わせられていくのかが記されている取扱説明書も、私たちがどの目標を目指していくのかが書いてある完成図が記された設計図もみことばの中に与えられているのです。そうであるなら私たちの責任は、この方の取扱説明書に、この方の設計図に従い続けていくことです。立つべき土台をいつも覚えて、私たちに与えられた使命をいつも覚えて、そして、ともに成長していきましょう！